

現代青年の友人関係のあり方に関する質的研究 KJ 法による自由記述の分析を通して

西村 麻希・長野 恵子

(西九州大学 健康福祉学研究科 健康福祉学専攻)

(平成24年10月31日受理)

Qualitative Analysis of Peer Relationships among the Youth A free description analysis via KJ Method

Maki NISHIMURA and Keiko NAGANO

Graduate School of Health and Social Welfare Science, Nishikyushu University

(Accepted: October 31 , 2012)

Abstract

This study analyses the current statuses of peer relationships among modern youth. A survey was conducted using a sample of 661 high school students (300 males and 361 females). The KJ method was employed to review a free description response in the survey from a qualitative standpoint.

Five ideal statuses of peer relationships were identified: “self-disclosure,” “mutual understanding,” “pleasantness,” “affinity,” and “exclusivity.” Furthermore, five situations that would cause self-discrepancy with an ideal peer relationship were identified: “conformity,” “restriction of speech,” “concern,” “dissimilarity with others,” and “involvement with unfamiliar people.” Finally, it became “fear of isolation,” “fear of hurting each other,” and “fear of complicating relationships.”

キーワード：現代青年、高校生、友人関係、KJ 法

Keywords : modern youth, high school students, peer relationships, KJ method

1. はじめに

近年、学校教育現場では、いじめや不登校さらには若年層の自殺増加などの問題が深刻化しており^{1,2)}、マスコミやメディアにおいても注目されている。このような問題がおこる背景には、社会・家庭・学校・本人に関わる様々な要因が存在しており、これらの要因が複雑に絡み合い問題が顕在化していることが考えられる。中でも、友人関係に端を発しているものも少なくなく³⁾、生徒が一日の大半を過ごす学校生活の中で、より充実した友人関係を形成していくことは、その後の成長や発達をより有意義なものにしていく上で、非常に大きな意味を有していると考えられる。

Erikson, E.H (1959) は、青年期の発達課題を「自我同一性の確立 (アイデンティティの確立)」としており、この課題を達成していくためには、仲間集団の存在が重要になってくることを述べている⁴⁾。つまり、同輩や仲間、そして同性・異性の友人関係の中で、様々な情緒的な体験を共有することを通して、親から精神的に自立し徐々に“自己”を確立していくことが、青年期における社会心理的な課題として挙げられている⁵⁾。

しかしながら、現代における青年期の友人関係は、「対人関係の希薄化」や「ふれあい恐怖」など、互いに傷つけないように気を遣い、表面的な関係にとどまろうとするといった、これまで求められてきた発達の特徴とは異なる様相がしばしば指摘されている^{6,7,8,9)}。さらに岡田 (1999) は、他者との衝突を避け、深い接触ができないといった現代青年の様相を指摘する一方で、孤独感を訴え内心は親密な関わりを望んでいるといった友人関係に対するアンビバレントな希求についても指摘している¹⁰⁾。

つまり、一見すると“希薄”に見える現代青年の友人関係の背後には、「理想として求めている友人関係のあり方」と「実際の友人関係のあり方」との間に不一致が生じていることが考えられ、友達との関わりの中で、ありのままに行動することへの躊躇や何らかの葛藤が存在していることがうかがえる。

このような視点をふまえると、青年がどのような友人関係を理想として求めており、どういった場面で理想との不一致を感じるのか、さらにその不一致が生じてしまう心理的背景について質的な視点から捉えていくことは、現代青年の友人関係の実態を把握していく上でとても重要なことであると考えられる。

したがって、本研究においては、現代青年の友人関係のあり方について、質的な側面からその実態について検討していくこととする。

2. 目的

- (1) 現代青年が理想として求めている友人関係像について明らかにする。
- (2) 友人関係のあり方に対する自己不一致感を、どのような場面で感じているのかを明らかにする。
- (3) 友人関係のあり方への自己不一致が生じる心理的背景について明らかにする。

3. 方法

- (1) 調査対象
A県内の県立高等学校3校の2年生、661名 (男子300名、女子361名) を対象とし、調査を実施した。
- (2) 調査期間
平成19年7月上旬～中旬
- (3) 調査方法
授業時間やホームルームの時間を利用して、無記名自己記入方式によるアンケート調査を実施した。調査時間は15分～20分とし、調査終了後はクラス担当の学校教諭より回収してもらった。
- (4) 調査内容
 - 1) 「理想として求める友達とのつきあい方」について
現代青年がどのような友人関係を理想として求めているのかを把握するために“あなたの理想の友人関係はどのような関係ですか? [記述項目①]”と質問し、自由記述形式で回答を求めた。
 - 2) 「友人関係のあり方への自己不一致感」について
友人関係のあり方への不一致感を、どのような時に感じているのかを把握するために“あなたは、どのような場面で自分の友人関係のあり方に不一致を感じますか? (友達と関わる中で、どのような場面で無理をしていると感じますか?) [記述項目②]”と質問し、自由記述形式で回答を求めた。
 - 3) 「友人関係のあり方に自己不一致が生じる心理的背景」について
友人関係のあり方に自己不一致が生じてしまう心理的背景を把握するために、その理由について自由記述形式で回答を求めた [記述項目③]
- (5) 自由記述の分析方法
自由記述形式で記入を求めたものについては、KJ法 (川喜田, 1970) に準じて質問項目ごとに分類・カテゴリ

4. 結 果

(1) 理想として求める友人関係

記述項目①「あなたの理想の友人関係はどのような関係ですか？」への回答が得られたのは全調査対象661名のうち、504名(76.2%)であった。さらに、その中から質問の意図から明らかに外れている回答や分類不能なラベルを省くと、469枚のラベル(男子179枚、女子290枚)が抽出された。KJ法によるグループ編成の結果、大きく5つのグループにまとめられた。グループ編成の結果と各グループの内容を下記に示す(Table .1)。

まず、1つめのグループには“素の自分で過ごせる関係”“本音で何でも話せる関係”“安心して落ち着ける関係”といったラベルが集約され、ありのままの自分を開示したり、言いたいことは互いに本音で表現し合えるような関係を理想とする内容であった。このような内容からこのグループを「①自己開示」と命名した。

2つめのグループには“お互いに分かり合える関係”“支え合える関係”“互いにぶつかり合えるような関係”といったラベルが集約され、友達同士が互いに理解し合い、支え合っていけるような関係を理想とする内容であり、これらを「②相互理解」と命名した。

3つめのグループには“楽しく過ごせて笑いが絶えない関係”や“仲良く過ごせる関係”が集約され、明るく楽しい雰囲気の中で友達と仲良く過ごせる関係を理想とする内容が記述されていたことから「③快活的」と命名

り化をおこなった¹³⁾。分類・分析を実施する際は、客観性をより確保するために、著者1名のほか、研究協力者として大学院修了生(臨床心理コース専攻)2名の計3名で実施した。KJ法の具体的な手続きについては以下に説明する。

① ラベルづくり

まず、自由記述から得られたデータについて、1つの意味を含む文章を1項目として、1枚のカードに記入する作業をおこなった。複数の文章が含まれる記述については内容を分割し、それぞれを1枚のカードに記入した。

② グループ編成(小グループ)

次に、質的に類似しているカードを収集していく作業をおこなった。

③ 表札づくり

グループが収集されたら、それぞれのグループに簡潔な言葉で表せる名前をつけていった。

④ グループ編成(大グループ)

②と③の作業を繰り返し、小さいグループから徐々に大きなグループになるようにカードを収集していった。

⑤ 図式化

最後に、最終的に収集されたグループをそれぞれの関係性を考えながら配置し、グループ同士の関係性について矢印などの記号を用いて図式化した。

Table .1 理想の友人関係について[記述項目①]

グループ(内容)	男子	女子	全体
A.【自己開示】: ありのままの自分を開示し、本音で言い合える関係 (ありのままの自分、素の自分で過ごせる関係) (本音を言える、何でも話せる関係) (安心して落ち着ける関係)	60 (34.1)	140 (48.2)	200 (42.6)
B.【相互理解】: 互いに理解し合い、支え合える関係 (分かり合える、理解し合える関係) (支え合える、助け合える、励まし合える関係) (互いに高め合うような関係、ぶつかり合える関係) (互いに信頼・尊重し合える関係)	42 (23.4)	84 (29.0)	126 (26.9)
C.【快活的】: 楽しく明るく過ごせる関係 (楽しく笑って過ごせる関係) (仲良く過ごせる関係)	53 (29.7)	36 (12.4)	89 (19.0)
D.【閉鎖的】: 深入りをせず、対立を回避するような関係 (喧嘩や対立、阻害や中傷がない関係) (適度な距離がある関係、深入りしない関係)	13 (7.3)	16 (5.5)	29 (6.2)
E.【類似性】: 類似点や共通点がある関係 (考えや価値観が同じ関係) (いつも一緒にいる、共に行動してくれる関係)	11 (6.2)	14 (4.8)	25 (5.3)
合計	179	290	469

数字は各グループのラベル数、()内は%

した。

4つめのグループには“喧嘩や対立、阻害・中傷がない関係”“深入りしない関係”などが集約され、互いに深入りをせずにある程度の距離を保ち、友達との対立を回避するような関係を理想とする内容が記述されていた。よって、このグループを「④閉鎖的」と命名した。

最後に、5つめのグループでは“考え方が一緒”“価値観が同じ”“一緒に行動してくれる”などが集約され、考えや価値観の類似性や同じ趣味を持ち一緒に行動してくれるといった、友人との類似性を理想とする内容が記述されていた。そこで、このグループを「⑤類似性」と命名した。

以上、5グループの分類から、現代青年が求める理想の友人関係として、最も多くの記述があったのは「自己開示(42.6%)」であり、友人にありのままの自分を開示し本音で言い合える関係を理想として求めていることが明らかになった。続いて「相互理解(26.9%)」「快活的(19.0%)」「閉鎖的(6.2%)」「類似性(5.3%)」の順に多かった。

(2) 友人関係のあり方への自己不一致場面

記述項目②「どのような場面で自分の友人関係のあり方に不一致を感じますか？」への回答が得られたのは全調査対象のうち、158名(23.9%)であった。その中から抽出されたラベルは、147枚(男子50枚、女子97枚)であった。KJ法によるグループ編成の結果、大きく5つのグループにまとめられた。グループ編成の結果と内容を下記に示す(Table .2)。

まず1つめのグループでは“愚痴や自慢話など聞きた

くない話を聞いているとき”“話や意見を合わせているとき”“相手に合わせた行動をしてしまうとき”など、周囲にいる友達の言動・行動に自分が合わせているような場面が集約され、これを「①同調場面」と命名した。

次に2つめのグループでは“言いたいことを言えないとき”“本音を言えないとき”など、友達に対して何らかの伝えたい思いがあるにも関わらず、ありのままに言うことができず、結果的に発言を抑制している場面が集約された。よって、このグループを「②発言抑制場面」と命名した。

3つめのグループでは“友達を嫌な気持ちにさせないように気を遣うとき”“友達の機嫌が悪いときに様子うかがうとき”“無理して笑顔をつくって心配をかけないように気を遣っているとき”など、友達に不快な思いや心配をさせまいと周囲に気を遣い、適応しようとしている場面が集約されたことから、「③気遣い場面」と命名した。

4つめのグループでは“親しくない人と関わるとき”“話したくない人と話しているとき”“苦手な人や嫌いな人と関わるとき”など、自分が苦手意識を抱いている人や親密感が薄い人と関わらざるを得ない場面が集約されたことから、このグループを「④非親密者との関与場面」と命名した。

最後に、5つめのグループでは“価値観が異なる”や“意見が違う”など、友人との間で考え方や意見が一致しない場面が集約された。したがって、このグループを「⑤他者との不一致場面」と命名した。

以上、5グループの分類において、友人関係のあり方への自己不一致を最も多く感じる場面は「同調場面」で

Table .2 友人関係のあり方への自己不一致場面 [記述項目②]

グループ (内容)	男子	女子	全体
A.【同調場面】: 周りの会話や行動に合わせている場面 愚痴や自慢話など聞きたくない話を聞いている場面 行動や会話を合わせている場面	29 (58.0)	49 (50.5)	78 (53.1)
B.【発言抑制場面】: 本音を言えずに抑えている場面 言いたいことを言えない場面 本音を言えない場面	9 (18.0)	17 (17.5)	26 (17.7)
C.【気遣い場面】: 友達の様子をうかがいながら気遣う場面 嫌な気持ちにさせないように気を遣う場面 場の空気を崩さないように気を遣う場面	3 (6.0)	21 (21.6)	24 (16.3)
D.【非親密者との関与場面】: 親しくない人と関わる場面 親しくない人と関わる場面 苦手な人と関わる場面	7 (14.0)	6 (6.2)	13 (8.8)
E.【他者との不一致場面】: 自分と友人との間に不一致が生じる場面 価値観が異なる場面 意見が合わない場面	2 (4.0)	4 (4.1)	6 (4.1)
合計	50	97	147

数字は各グループのラベル数、()内は%

あり、53.1%を占めていた。続いて「発言抑制場面（17.7%）」「気遣い場面（16.3%）」「非親密者との関与場面（8.8%）」「他者との不一致場面（4.1%）」の順に多かった。

(3) 友人関係のあり方に自己不一致が生じる心理的背景について

自由記述③では、自身の友人関係のあり方に自己不一致が生じる理由について記述してもらった。回答が得られたのは全調査対象のうち、65名(13.3%)であった。その中から抽出されたラベルは、48枚(男子18枚、女子30枚)であった。KJ法によるグループ編成の結果、大きく3つのグループに集約された。グループ編成の結果と内容を下記に示す(Table.3)。

まず、1つめのグループでは“一人になりたくないから”“避けられたくないから”“グループから離れたくないから”といった内容が集約され、周りの友人や自分が属しているグループから、孤立してしまうことを恐れるような記述であった。したがって、このグループを「①孤立化することへの恐れ」と命名した。

次に、2つめのグループでは“友人関係を崩したくないから”“面倒くさいことにならないように”“複雑な関係にならないように”といった記述が集約され、今ある友人関係が崩壊したり複雑化するのではないかといった内容が記述されていた。よって、このグループを「②複雑化することへの恐れ」と命名した。

最後に、3つめのグループでは“相手が傷つくかもしれないから”“嫌な思いをさせたくないから”といった記述が集約され、友人に不快感を与えたり、自分の言動で相手を傷つけてしまうのではないかといった内容が記述されていた。したがって、このグループを「③傷つけあうことへの恐れ」と命名した。

以上、3グループの分類において、最も多くの理由と

して述べられていたのが「孤立化することへの恐れ」であり、全体の43.8%を占めていた。続いて「複雑化することへの恐れ(31.2%)」「傷つけあうことへの恐れ(25.0%)」の順に続いていた。

5. 考 察

本研究では「理想として求める友人関係のあり方」と「理想との自己不一致が生じる場面について」、さらには「自分の友人関係のあり方に自己不一致が生じる心理的背景」について自由記述による回答を求めた。ここでは、KJ法によるグループ編成の結果をさらに図式化(Figure.1)し、現代青年の友人関係のあり方について考察を述べていくこととする。

(1) 現代青年の友人関係のあり方について

[理想の友人関係のあり方と自己不一致場面からみえる友人関係像について]

本研究では、現代青年の友人関係のあり方を把握していくにあたって、3項目の自由記述による質問をおこなった。ここでは、そのうちの2項目の質問に着目し、「現代青年が理想として求める友人関係のあり方(項目1)」と、「友人関係のあり方への自己不一致場面(項目2)」の特徴について、図式化から得られた4つの視点を軸に考察を述べていく。

まず1つめに、理想の友人関係のあり方として最も多くの回答が得られた内容は「ありのままの自分を開示し、本音で言い合える関係(自己開示)」であり、次いで「互いに理解しあえる関係(相互理解)」という内容があげられた。これらの特徴を踏まえると、多くの青年が“ありのままの自分の姿で友達と関わりたい”あるいは“本音で友達と話したい”といった関わりを求めており、友人間において積極的に自己開示することを通し

Table.3 友人関係のあり方に自己不一致が生じる心理的背景 [記述項目③]

グループ(内容)	男子	女子	全体
A.【孤立化することへの恐れ】: 友人関係の中で孤立することへの恐れ 孤立しそうだから 一人になりたくないから 避けられたくないから	7(38.9)	14(46.7)	21(43.8)
B.【複雑化することへの恐れ】: 複雑な関係になることへの恐れ 友人関係を崩したくないから 面倒くさいことにならないように 複雑な関係にならないように	6(33.3)	9(30.0)	15(31.2)
C.【傷つけあうことへの恐れ】: 友人と傷つけあうことへの恐れ 傷つけたくないから 嫌な思いをさせたくないから	5(27.8)	7(23.3)	12(25.0)
合計	18	30	48

数字は各グループのラベル数、()内は%

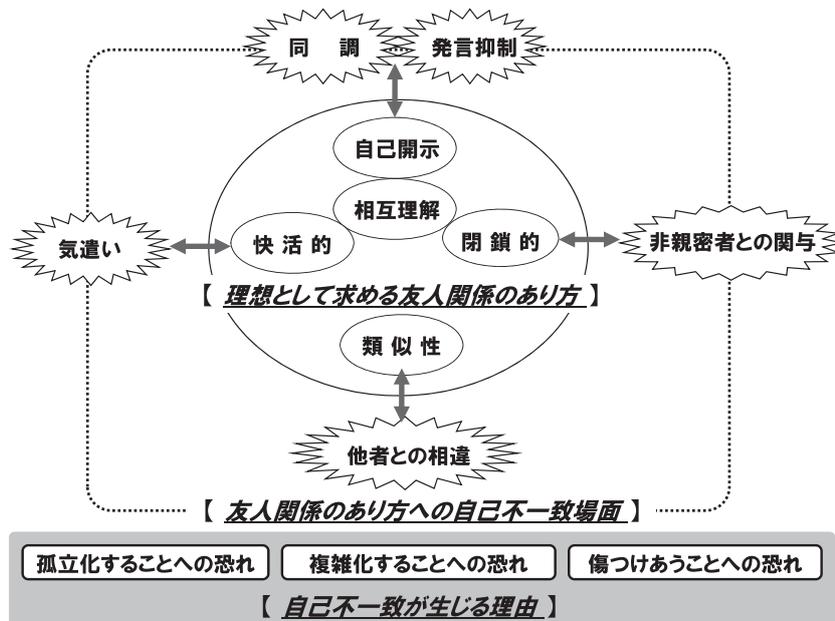


Figure .1 現代青年の友人関係のあり方

て、他者と相互理解を図りたいという思いが存在していることが窺えた。このような友人関係への理想像を踏まえると、“周囲の会話に合わせた”や“聞きたくない話を聞かされる”といった「同調場面」や“言いたいことが言えない”“本音を言えない”といった「発言抑制場面」こそが、自身の友人関係のあり方に不一致感を抱かせる場面として繋がりがやすいことが推察できる。中でも「同調場面」に関しては、男女ともに半数以上が自身の友人関係のあり方に不一致を抱く場面として挙げており、日常の友人関係の中でも多く遭遇する場面であることが示唆できる。“自分を開示して関わりたい”と望みながらも同調行動をとってしまう青年の心理的背景を知ることは、現代青年の友人関係のあり方を理解していく上で重要な視点であると考えられる。その心理的背景については本調査から得られた知見をもとに、後ほど考察を述べていくこととする。

次に2つめの特徴として、“楽しく明るく過ごせるような関係”“笑いが絶えない関係”といった「快活的」な関係を理想の友人関係像として求めていることが明らかになった。しかしその一方で、このような雰囲気壊すまいと“無理して笑顔をつくり、その場の空気が崩れないように気を遣う”さらには“友達に不快な思いをさせないように振る舞う”といった「気遣い場面」が自己不一致場面として生じていることが推察された。岡田(2002)によると、友人との間で群れて楽しさを追求するような軽躁的關係が優位な青年は、全般的に適応感が高いが、心理的側面においては、理想像との隔たりを持ち、自己不一致的な状態にあることを指摘している^{12,13)}。つまり、一見すると楽しい雰囲気の中で、円滑な友人関係を築いているように見えたとしても、内面的には周囲の友人を気遣い、明るくて元気な自分を演じている場合

もあり、必ずしも表面 - 内面間が一致しているという訳ではないということが示唆される。このような特徴を踏まえると、青年の友人関係を理解していく際には、表面的な側面のみに着目して捉えるのではなく、内面的な側面との不一致をも想定しながら捉えていく視点が重要になるのではないかと考える。

続いて3つめの特徴として、“自分との価値観が同じ関係”“いつも一緒にいて共に行動してくれるような関係”といった友人との「類似性」を理想の関係として求めていることが明らかになった。Sullivan, H. S (1953) は、青年期の友人関係の発達過程について、前青年期の「同類愛的選好」から青年期の「異類愛的選好」へ変化すると指摘しており¹⁴⁾、友人との類似性・共通性を見いだしていく中で自己像のモデルをつくり、さらには異質性をも視野に入れることを通して、自己を構築していくと述べている¹⁵⁾。つまり、友人との類似性・共通性だけでなく、互いの異質性をも認めていく過程を経て、自立した自己が確立されていくのではないかと考える。このような、青年期における発達過程を踏まえると“意見が合わない場面”や“考え方が周囲と違う場面”といった「他者との相違」が顕在化する場面に自己不一致感を抱くという結果が得られたことは、まさに Sullivan, H. S (1953) が指摘している発達過程のなかにあることが示唆され、青年たちが同類愛的選考から異類愛的選考への移行をこれから迎えていく段階にあるのではないかと推察できる。

最後に4つめの特徴として、“喧嘩や対立がない関係”や“互いに深入りをしない関係”といった、対立や深入りを回避するような「閉鎖的」な友人関係を理想として求めていることが明らかになった。本調査から得られた記述内容のみを着眼すると、友人間での衝突を避け、互

いに深入りしないといった姿勢を持つことで自分自身の身を守り、平穏で安定的な関係を維持しようとする友人関係のあり方が窺えた。この点に関して大平(1995)は、距離を置き、相手の気持ちを詮索せず踏み込まない関係を保つことが、相手を傷つけない青年の“やさしさ”であるとも指摘しており¹⁶⁾、このよう知見を含めると、相手との距離を保ち衝突を回避することで、“傷つけられる”あるいは“傷つける”体験を未然に回避しようとしている関係像が窺えた。相手との距離感を詮索し、傷つけ合うことから自分の身を守ろうとする関係性を踏まえると、普段あまり関わりのない“非親密者との関与場面”は、相手との距離感をどのように保てばいいのか分からない場面でもあり、自己像を脅かされ負荷のかかる場面として繋がりがやすいのではないかと考える。

ここまで、現代青年の友人関係の特徴について論考してきたが、近年若者が携帯やメール、ブログといった通信メディアの中に一体感を求めようとする心理にも、これらの特徴は繋がっているのではないかと考える。様々な通信メディアが普及・浸透したことで、“手軽に”“間接的に”相手の都合に合わせることなく“自分のペース”で“選択的”に他者と関わることが可能となった。先述したような友人関係の特徴を持つ現代青年にとって、このような通信メディアは、非常に魅力的なコミュニケーション・ツールとなるのかもしれない。情報化社会の進展にともなうコミュニケーション様式の激変は、その渦中にある青年たちの友人関係のあり方にも深く影響していることが窺える。

最後に、本研究における自由記述への回答姿勢のあり方から論考を述べると、質問項目(1)理想として求める友人関係への回答76.2%、(2)友人関係の自己不一致への回答23.9%、(3)自己不一致が生じる心理的背景への回答13.3%と、友人関係に関する質問内容が少しずつ深くなるにつれ、徐々に回答率が低下していることが特徴として挙げられた。このような、特徴を踏まえると、自身が持つ友人関係への意識自体も希薄化しており、関心が向きにくい様相があるのではないかと示唆された。

(2) 友人関係のあり方に自己不一致が生じる心理的背景について

理想として求めている友人関係のあり方があるながらも、友人間で思うように振る舞うことができないといった自己不一致場面が生じる心理的背景として、本研究では「孤立化することへの恐れ」「傷つけあうことへの恐れ」「友人関係が複雑化することへの恐れ」といった3つが集約された。中でも、“避けられたくないから”“一人になりたくないから”といった、友人関係からの孤立を恐れる内容については、男女ともに最も多くの割合を占めており、友人関係を築いていく中で青年が抱きやす

い心情であることが窺えた。詫摩(1983)は、青年にとって孤立化することは、友達に見捨てられた弱々しい状態であるといったイメージを抱かせやすいということを通じて、周囲からそう見られないように大勢の中に身を置いて安心を求めていると指摘している。つまり、孤立して浮いた存在になることや周囲からの評価を恐れ、それを回避するために「発言抑制」や「同調」さらには「気遣い」といった自己不一致場面が生じていることが考えられる。孤立化することを恐れながらも、今ある関係から外れないように、不一致感を抱きながらも友人と関わっていることが示唆された。

また、“嫌な思いをさせたくないから”“相手を傷つけたくないから”といった友人間での「傷つけあうことへの恐れ」については、相手との心理的距離のとり方や親密さをめぐる葛藤の視点からも注目されており、現代青年の人間関係における重要なテーマとなっている^{8, 20, 21)}。藤井(2001)は、親密な関係を持ちたいと願う一方で、傷つけあうことを恐れ「適度な」心理的距離を模索して揺れ動いている青年の友人関係像を“山アラシ・ジレンマ”という比喻を用いて指摘しており、浅く表面的なつきあい方をする青年の内面には、非常に複雑な葛藤が生じていることを述べている。このような指摘を踏まえると、「孤立化することへの恐れ」や「関係が複雑化することへの恐れ」についても、“避けられて一人になるのではないかと”“関係が崩れるのではないかと”といった傷つき体験への不安として繋がりがやすいことが推察され、このような事態を未然に回避するために、「閉鎖的」な関係をもったり、友人への過剰な「気遣い」や「同調」「発言抑制」といった、葛藤を抱くような関係のあり方が表面化しているのではないかと考える。

本研究では、青年が友人関係を築いていく中で、様々な葛藤を抱き、模索しながら友人と関わろうとしている姿が示された。今後、充実した友人関係の中で青年が発達していけるためにも、表面的な様相のみならず、その背後に隠れた心情や葛藤にも目をむけて青年像を理解していくことはとても大切なことではないかと考える。

7. 今後の課題

本研究では、現代青年の友人関係のあり方について、質的な側面からその実態について検討することを試みた。質的データからの分析ということで、筆者の主観的解釈に依存するところが大きくなったが、現代青年が様々な葛藤や不安を抱きながら友人関係を築いている様相を垣間みることができた。今後は、現代青年の友人関係のあり方について、量的・質的の両面の視点からさらに検討していく必要があると考える。

< 付 記 >

本稿は、西九州大学大学院で作成した修士論文（平成19年度）の一部をまとめたものである。論文の作成にあたり、多大なご協力とご配慮をいただきました高等学校の生徒の皆様、先生方お一人おひとりに深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 平成23年度 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査（平成24年9月11日発表），文部科学省
- 2) 平成23年度 我が国における自殺の概要及び自殺対策の実施状況，内閣府
- 3) 岡安孝弘・嶋田洋徳「中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係」，心理学研究，63(5)，310-318，1992
- 4) エリクソン，E. H. (1959)，小此木啓吾訳「自我同一性～アイデンティティとライフサイクル～」，誠信書房，1973
- 5) 馬場禮子・永井 徹「ライフサイクルの臨床心理学」，培風館，1997
- 6) 岡田 努「現代青年の友人関係に関する考察」，青年心理学研究，5，43-55，1993
- 7) 山田和夫新版「ふれ合い」を恐れる心理青少年の“攻撃性”の裏側にひそむもの，亜紀書房
- 8) 千石 保「まじめ」の崩壊 - 平成日本の若者たち - ，サイマル出版会，1991
- 9) 岡田 努「現代青年の心理学 - 若者の心の虚像と実像 - 」，世界思想社，2007
- 10) 岡田 努「現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について」，教育心理学研究，47，432-439，1999
- 11) 川喜田二郎「発想法<続> - KJ法の展開と応用 - 」，中公新書，1970
- 12) 岡田 努「友人関係の現代的特徴と適応感及び自己像・友人像の関連についての発達的研究」，金沢大学文学部論集行動科学・哲学篇，22，1-38，2002
- 13) 鶴養啓子「いま、思春期の友だち関係はどうなっているか」，児童心理，814，1-9，2004
- 14) Sullivan, H. S., The Interpersonal Theory of Psychotherapy. W.W.Norton & Company, INC., New York, 1953
- 15) 宮下一博「青年期の同世代関係落合良行・楠見 孝（編）講座生涯発達心理学 第4巻自己への問い直し 青年期」，金子書房，155-184
- 16) 大平 健「やさしさの精神病理」，岩波書店，1995
- 17) 保坂一己「中学・高校のスクール・カウンセラーの在り方について - 私立女子高での経験を振り返って - 」，東京大学教育学部心理教育相談室紀要，15，65-76，1993
- 18) 佐藤有耕「高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析」，神戸大学発達科学部研究紀要，3(1)，11-20，1995
- 19) 平井信義「思春期相談第2版」，有斐閣，1983
- 20) 岡田 努「現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察」，教育心理学研究，43，354-363，1995
- 21) 上野行良・上瀬由美子・福富 護・松井 豊「青年期の交友関係における同調と心理的距離」，教育心理学研究，42，21-28，1994